

女子美術大学アート・デザイン表現学科 3年次・選択

## メディアクリエーション演習 (金曜日特別授業)

〈藝術〉が「あたらしい神」となるまで

(講義第2回：2016-11-18)

担当： 石井 拓洋  
ishii05042@venus.joshiu.ac.jp

2016

### 【資料での表記について】

- ・「」内は著作物からの引用
- ・〈〉内は専門用語、一般用語、語の強調。
- ・※印以下の記述は、石井の考えを多く含むもの
- ・[]内は、石井による補足

# 〈芸術〉と〈藝術〉

- ・ 〈藝術〉は、そもそも、明治期に、西周が “ Art ” を訳すにあたり、新たにつくった語
- ・ 〈藝術〉の語をつくるにあたり、それが漢字であるため、西は、中国の書を参照した
- ・ 〈藝〉の字は、『論語』や『周礼』(しゅうらい) にみられる。 前漢 ( 前2世紀 )
- ・ 当初、西は〈藝術〉としたが、のちに、その略語として〈芸術〉が普及した

出典： 今道友信 『美について』 講談社現代新書、1973年、75～76頁。

# 〈芸術〉と〈藝術〉

- ・「藝」の意味とは [今道、75-76頁]
  - 「ものを種える」[うえる, 植える] の意味
  - 「人間精神において内的に成長してゆく或る価値体験を種えつける技」の意味
- ・「芸」の意味とは [今道、75-76頁]
  - 農業用語、音読みは「うん」、訓読みは「くさぎる」
  - 「草を刈り取ること」の意味
- ・ つまり、「芸」の語は、「原意の藝とは反対の意味を持つ字」 [今道、6頁]

# 〈芸術〉と〈藝術〉

「しかし、当用漢字の制度では、[芸の字を]『ゲイ』と読んで『藝』の略字であるという風に定められ普及してしまったので、こういう間違ったことに妥協するのはよくないことではあるが、その制度のもとに育っている多くの読者の便をはかれば、この字[芸]で藝の意味を理解するほかはない」 [今道, 76頁]

「『げいじゅつ』とは、人間の精神によい種子を植えつけるものだと思いますから、芸術ではなく藝術の方が、正しいばかりでなく、それこそ美しいと思いますが、致し方ありません」

[今道, 6頁]

※ この講義では、しかし、「『藝術』を使用すべきだ」と言ってるのではなく、そうではなくて、美大生が学ぶべきは、このような経緯こそ[つまり、専門教養こそ]という意図をもって、これを話した。

## きんだい 【近代】

2. (modern age) 歴史の時代区分の一。広義には近世と同義で、  
一般には 封建制社会 のあとをうけた 資本主義社会 についていう (広辞苑 p.733)。

中世  
↓  
近世

11C頃 「封建社会」  
17C頃 「絶対王政」 を経過

(主従関係)



↓  
近代

18C末 「フランス革命」  
「市民社会」 の成立 (封建社会の打破)

(自由と平等)

# • 啓蒙思想 Enlightenment

- 17Cから18Cの 西欧における旧弊打破の革新的な思想
- 合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜をした
- 〈キリスト教・王侯貴族〉のためから、**〈市民〉のための生活へ**
- 啓蒙思想が 〈近代〉 を 導いた

# ルネ・デカルト (1589 - 1650)      Rene Descartes

それまでの中世のスコラ学、神学を批判して、合理的探究 (科学) の基盤をつくった



画像 : <http://www.ghc.usp.br/server/Sites-HF/Fabio-Ardito/>

- 「私は考える、それ故に私は有る」 (哲学的思考の出発点)
- 神の合理的な存在証明 (証明の目的 = 人間の認識能力の正確さを担保するため。ただし証明に難あり)
- 精神と物質の〈物心二元論〉へ (精神と身体、人間と自然、あらゆる二項対立が派生)

## 啓蒙思想のルーツ

「私は考える、それ故に私は有る」 (哲学的思考の出発点、『方法序説』1637)

“Cogito, ergo sum” (コーギト・エルゴ・スム)

Q. 一体、この世で確実に存在すると言えるものは有るのか？

A. 全ての存在を疑いつくしている、この〈疑っている私〉の存在を、私は疑えない。

(〈私の存在〉を疑うとしても、〈疑っている意識〉が確かにある。無からは何も生じない。だから疑う意識が生まれるのは「私」が存在する証拠だ)

「自分が真理を語っていることを私に保証しているところの

『私は考える、それ故に私は有る』という命題のうちには、

考えるためには存在しなければならぬことを私はきわめて明白にみる、

ということ以外には何ものも無いことをみとめた」

(デカルト「第4部」『方法序説』落合太郎訳、岩波文庫[青613-1]、1953年初版、p.46)

つまり、すくなくとも「主観」は確かに存在する。

## 啓蒙思想の特徴 : 西欧「近代主義」の特徴

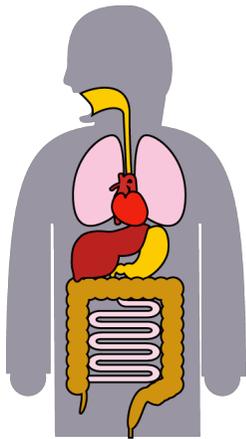
- **西欧中心主義** eurocentrism  
西洋こそが世界で最も進んだ文明であるという考え
- **要素還元主義** reductionism  
物事の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え
- **進歩主義** progressivism  
新しいことは常に良いとする考え
- **人間中心主義** anthropocentrism / humanism  
たとえば、人間を 自然環境・生物 など 万物の中心とする考え
- **機械論** mechanism  
人間は科学によって自然を制御することができるとする

# 「要素還元主義」：近代主義的世界観の要素としての

## 「要素還元主義」 reductionism

「私の研究しようとする問題のおのおのを、できうるかぎり多くの、  
そうして、それらのものをよりよく解決するために  
求められるかぎり細かな、小部分に分割すること」

(デカルト「第二部」『方法序説』落合太郎訳、岩波文庫[青613-1]、1953年初版、p.29)



画像: [http://bsoza.com/ill\\_medical/body02\\_a05.htm](http://bsoza.com/ill_medical/body02_a05.htm)

Q. 人間の体の仕組みを知りたい

- 各臓器ごとに分割して取り出して考える
- 各臓器が持つそれぞれの機能を把握する
- 分割した各臓器を再び組み合わせる。元通りになる。

「科学」

しかし、把握可能か？本当に元通りになるのか？  
本来、全体の中でこそ機能していたのでは？

参照 「2対6対2の法則」「アリの法則」（2割が生産的、6割は普通、2割が非生産的。しかし、、、）

## 「進歩主義」：近代主義的世界観の要素としての

「進歩主義」 progressivism 人間に不可欠なるもの。一方、その批判も。

「 進歩的思想という、もっとも広い意味での啓蒙 が追求してきた  
目標は、人間から恐怖を除き、人間を支配者の地位につけるということ  
であった。しかるに [にもかかわらず]、あます所なく啓蒙された地  
表は、今、勝ち誇った凶徴 [凶を示すもの] に輝いている。

(ホルクハイマー&アドルノ (1947=1990) 『啓蒙の弁証法』 岩波書店、p.3)

- ※ 二度の大戦争、ナチスの蛮行、核兵器による大虐殺。  
また、現代のインターネット環境など、科学の発展は、しかし、  
われわれに常に楽観的に明るい未来を約束するものなのか？

## 「機械論」：近代主義的世界観の要素としての

「機械論」 科学は自然の営みの制御・予測が可能か？

機械論 mechanism

自然界の諸現象を、霊魂や内的目的などの目的論的な概念を一切用いずに、作用因のみによって作動する機械とのアナロジーに基づいて解釈しようとする決定論的な、かつ還元主義的な思想。

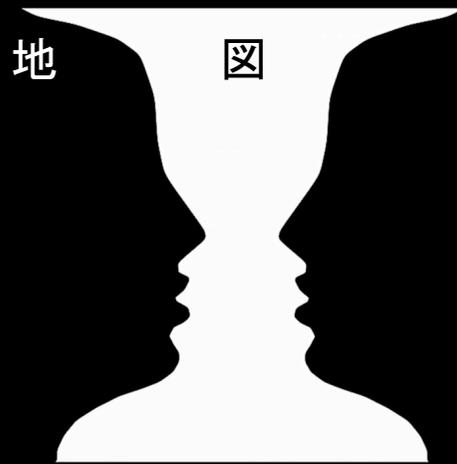
( 横山雅彦「機械論」『岩波・哲学思想事典』岩波書店、p.303)

※ 異常気象・大地震・大噴火、あるいは核エネルギー、、、  
自然のスケールは、しかし、人間よりも遥かに大きいのではないか？

## ただし、単純な近代批判は危険

- ただし、安易な「近代批判」はつつしみたい
- 近代主義の恩恵を把握し、慎重に省察する姿勢が必要
  - 楽観的な一元論・融合（あまりに単純なる「自然回帰」 etc..）
  - 「未完のプロジェクト」ハーバーマスの視点
- 「近代」の省察には、われわれの住む世界に関する、果てしない「インプット」がまずは必要。

〈インタラクティブ・アート〉と〈西洋近代藝術〉との関係とは？



- ・ ものごとは、一方に「図」があれば、かならずもう一方に「地」がある。
- ・ 「図」と「地」が共存することによって、はじめて全体が成立する。相互依存的である。
- ・ 「図」または「地」のうち、一旦いずれかに着目すると、もう一方が見え難くなりがちだ。
- ・ 「図」と「地」には優劣はない。存在としての水準は同程度である。

Ex.) 強者と弱者、中心と周縁、役にたつものと役にたたないもの、新しいものと古いもの、順境と逆境、男と女、陽と陰、、、

〈インタラクティブ・アート〉 というものが存在するならば、

〈インタラクティブではない〉 アートが前提として存在せねばなりません。

これは、〈関係論〉 的な思考 ( 〈図と地〉 の思考 ) に照らし合わせてもまた、  
明らかでしょう。

そしてまた、〈インタラクティブ・アート〉 の藝術的意義とは、

〈インタラクティブではないアート〉 の在り方について、

それを批判的に乗り越える試みであることにこそ見だし得ると考えられます。

〈インタラクティブ・アート〉が、批判対象としたアート、  
その淵源をたどると、〈インタラクティブではないアート〉、  
つまり、〈西洋近代藝術〉に帰着します。

なぜ、これほど明確に言い切れるのでしょうか？

それは、〈自律美学〉を最大の理念とするのが〈西洋近代藝術〉だからです。

つまり、〈西洋近代藝術〉が〈自律的〉であるだけに、

そこに「インタラクティブ性 (相互関連性)」は存在しえません。

それでは、一体なぜ、近代において自律性こそが理念されたのか？

その歴史的経緯、社会的背景とは？

また、〈自律美学〉に、藝術として、どのような意義がみいだされていたのか？

さらにまた、そこには、**どのような乗り越えられるべき問題があったのか？**

このような問いに対峙していくことは、〈インタラクティブ・アート〉の

構想、制作、批評の、それぞれの営みに、藝術的側面での思考の奥行きをうむ

契機となるでしょう。

〈インタラクティブ・アート〉が存在しうる前提である、  
本来的に非インタラクティブなる〈西洋近代芸術〉に関する知見は、  
〈車の両輪〉のように不可欠なもう片方といえます。

藝術的側面において、一体、何が本当の意味での「新しい」かを考える  
ならば、つまるところ、〈藝術〉概念に照らしあわせて「新らしい」ことに  
帰着すると考えられます。そのとき、その概念の根源となる〈西洋近代藝  
術〉への批判的検討の視点は、私たちの思考の手始めとして、有益なもの  
なるでしょう。

したがって、私たちは、〈インタラクティブ・アート〉を考察するために、  
ここで非インタラクティブな〈西洋近代芸術〉を取り上げたいと思います。

本当に〈藝術〉は西洋近代に、はじめて生まれた概念なのか？

- 「一八世紀中葉以前には〔1750年頃以前には〕、今日われわれが『芸術』と呼んでいるものを、、、指し示す概念は存在しなかった。『芸術』という概念は『近代』の所産にほかならない」

小田部胤久 『芸術の逆説：近代美学の成立』、3頁

- 「ドイツでは1750年代頃からこのような考えが顕著なものとなり、他の国々に先駆けて『芸術』という概念を成立させ、それを大きな観念体系に育てることができた」

松宮秀治 『芸術崇拜の思想』、174-175頁。

- 「十八世紀までは、ほとんどの sciences ( 学問) は arts ( 技芸) だった」
- 「大文字で始まる 抽象的な Art ( 芸術) [略] この概念が広まったのは一九世紀 になってからのことである」

レイモンド・ウィリアムズ 「art 芸術・美術・技術」『完訳キーワード辞典』平凡社、1976 =2002、37～40頁。

「今日われわれが普通に使用している『芸術』という概念は  
もともと西洋の近代社会において成立した概念である」

[ 村田誠一 : 242 ]

- ・ 職能 (役に立つこと) から切り離し、俗なる人間的要素を排除する文化
- ・ 純粹なる作品 ( 作品を構成する要素から不純な要素を徹底排除 )
- ・ 人間の特殊な能力としての 靈感と想像力による作品
- ・ 人間のあるべき姿を示す「教養材」と見なされるべきもの
- ・ 神にも匹敵する、人間の秘めたる内面的な精神の「表出」を企図

= 藝術

「ドイツでは1750年代頃から **このような考え** が顕著なものとなり、  
他の国々に先駆けて「芸術」という概念を成立させ、  
それを大きな観念体系に育てることができた」

[ 松宮、174-175 ]

〈主体性〉 (理性的個人の性格) をともなった 美的表現

近代以前での、後の〈藝術〉の兆しとなるものとは？



「正殿」

<http://bienvenue.chateauversailles.fr/en/accueil>

フランス 「ブルボン朝」 **ベルサイユ宮殿**



「鏡の回廊」

[http://en.wikipedia.org/wiki/Hall\\_of\\_Mirrors](http://en.wikipedia.org/wiki/Hall_of_Mirrors)

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



プチ・トリアノン「社交の間」  
撮影: T. ISHII

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



Gerard Corbiaud "Versailles : la visite" AV600097, Montparnasse Productions, 1999, [ DVD ] より ( 1分程度, 王室オペラ劇場 ).  
<http://www.editionsmontparnasse.fr/p717/Versailles-la-visite-DVD>

「藝術」概念の誕生前 = 「宮廷文化」 = 「近代藝術」が乗り越えるべきとした対象

「『王は願望を述べ、芸術家たちは構想を提出し、役人達は計算し、委員会では協議が行われた。手職人の一隊、大工、画家、仕立屋、庭師、料理人が動員された。

〔中略〕数千人の労働者が10万時間働いた、— それもおそらく一夜のうちに浪費されるためであった』（〔※リヒャルト・アレヴィン『大世界劇場』より〕」

「花火、衣装、食事、建築、噴水、庭園、芝居、踊りなどと並んで— こうした壮大な祝祭を演出するために欠かせない小道具の一つが、音楽だったのである」

岡田暁生 『西洋音楽史』：65 – 66.



「サンピエトロ大聖堂」(ヴァチカン)での「ミサ」より、「感謝の典礼」と「交わりの儀」の部分。  
先代のローマ教皇 ヴェネデクト 16世による。(4分程度)

# ロ可可様式 Rococo Style



D.ツィンマーマン設計 「ヴィース巡礼教会」(1745頃) (ドイツ)  
装飾的表現、優美・軽快、貴族的・フランス的



テレビ 映画作品 『王妃マリー・アントワネット』 (2006, フランス制作, 抜粋20分) ※ DVDでも出版されている

絶対王政の時代のフランスでは、国民の身分は三つの身分に大別されていた。  
第一身分は聖職者、第二身分は貴族、第三身分は、新興資本家階級(ブルジョワ階級)、小商人、職人、小市民、芸術家(以上、プチブルジョワ階級)、農民。市民革命は第三身分による革命。

近代において、いかに、「藝術」概念が誕生するに至ったか？

〈啓蒙思想〉や〈主体性〉とどのように関わっているのか？

(主たる参考文献)

松宮秀治『芸術崇拜の思想：政教分離とヨーロッパの新しい神』東京：白水社、2008年。

# • 啓蒙思想 Enlightenment

- 理性的思惟によって宗教的権威や王侯貴族に抵抗した

- 「キリスト教・王侯貴族」のためから、「市民」のための生活へ
- 啓蒙思想が「近代」を導いた

## 啓蒙思想 からの 絶対王政批判 (政治的側面)

イマヌエル・カント (1724 - 1804) Immanuel Kant

「自己みずからの悟性 を使用する勇気をもて」

カント 『啓蒙とは何か』 (1784 = 1974)

悟性：「感性によって得た所与を認識へと構成する概念能力」(広辞苑)

※ 経験によって得た知恵。「実践理性」。ここから、あるべき姿 (道徳) としての「当為」へ。

## 啓蒙思想 からの 絶対王政批判 (政治的側面)

イマヌエル・カント (1724 - 1804) Immanuel Kant

「自己みずからの悟性 を使用する勇氣をもて」

カント『啓蒙とは何か』(1784 = 1974)

悟性：「感性によって得た所与を認識へと構成する概念能力」(広辞苑)

※ 経験によって得た知恵。「実践理性」。ここから、あるべき姿 (道徳) としての「当為」へ。

- 個人の「『真善美』以外のいかなる権威にも服従するな」の意
- 「カントの『啓蒙とは何か』は、、、  
「王権」と「宗教」の**伝統主義的な権威を破壊**するための闘争目標」

## 啓蒙思想 からの 絶対王政批判（政治的側面）

イマヌエル・カント（1724 - 1804） Immanuel Kant

啓蒙主義は「伝統主義的な権威を破壊」を志向する

→ 伝統的権威による社会の「リセット」を志向する

「啓蒙思想は人間活動の全領域において、

すべての過去の伝統と権威を支えていた思想、制度にたいして、

『御破算で願ひましては』とゼロ地点に出発点を求めるよう

要求するのである」

[松宮：99 f.]

この「リセット」への志向こそ、同時代人らによる、

「無垢なる自然状態」、「善良な未開人」（ルソー）に対する共感につながる。

文化的分野で、啓蒙主義的な「リセット」

文化的分野で、啓蒙主義的な「リセット」を行なったのが、

# ヴィンケルマン

J.J. Winckelmann (1717 - 1768) ドイツの美術史家



画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

文化的分野で、啓蒙主義的な「リセット」を行なったのが、

# ヴィンケルマン

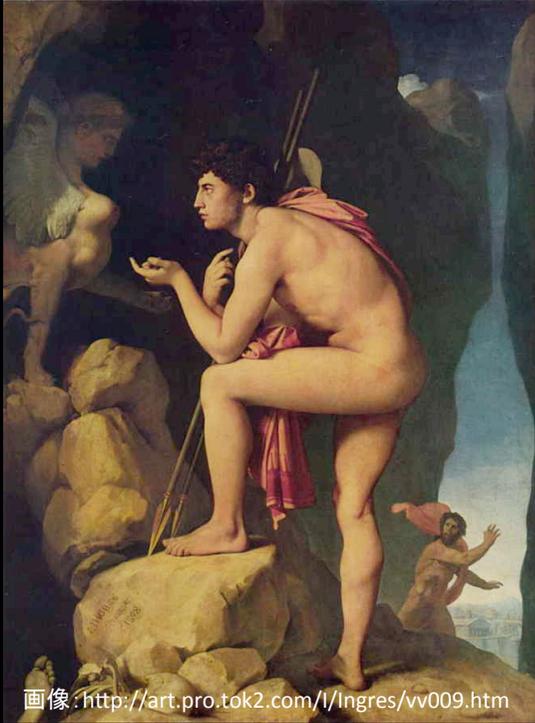
J.J. Winckelmann (1717 - 1768) ドイツの美術史家

## 『ギリシア美術模倣論』 (1755)

- 享乐的・感覚的な宮廷文化を表すロココ文化の批判
- ロココ文化を啓蒙主義的に「リセット」
- 「リセット」後の規範を、古代ギリシャ芸術（彫刻）の模倣（人工物の模倣）にもとめた。
- 一旦、リセットした後、新たな進歩的な文化の創設を志向した（新古典主義へ）



画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より



画像:<http://art.pro.tok2.com/l/Ingres/vv009.htm>

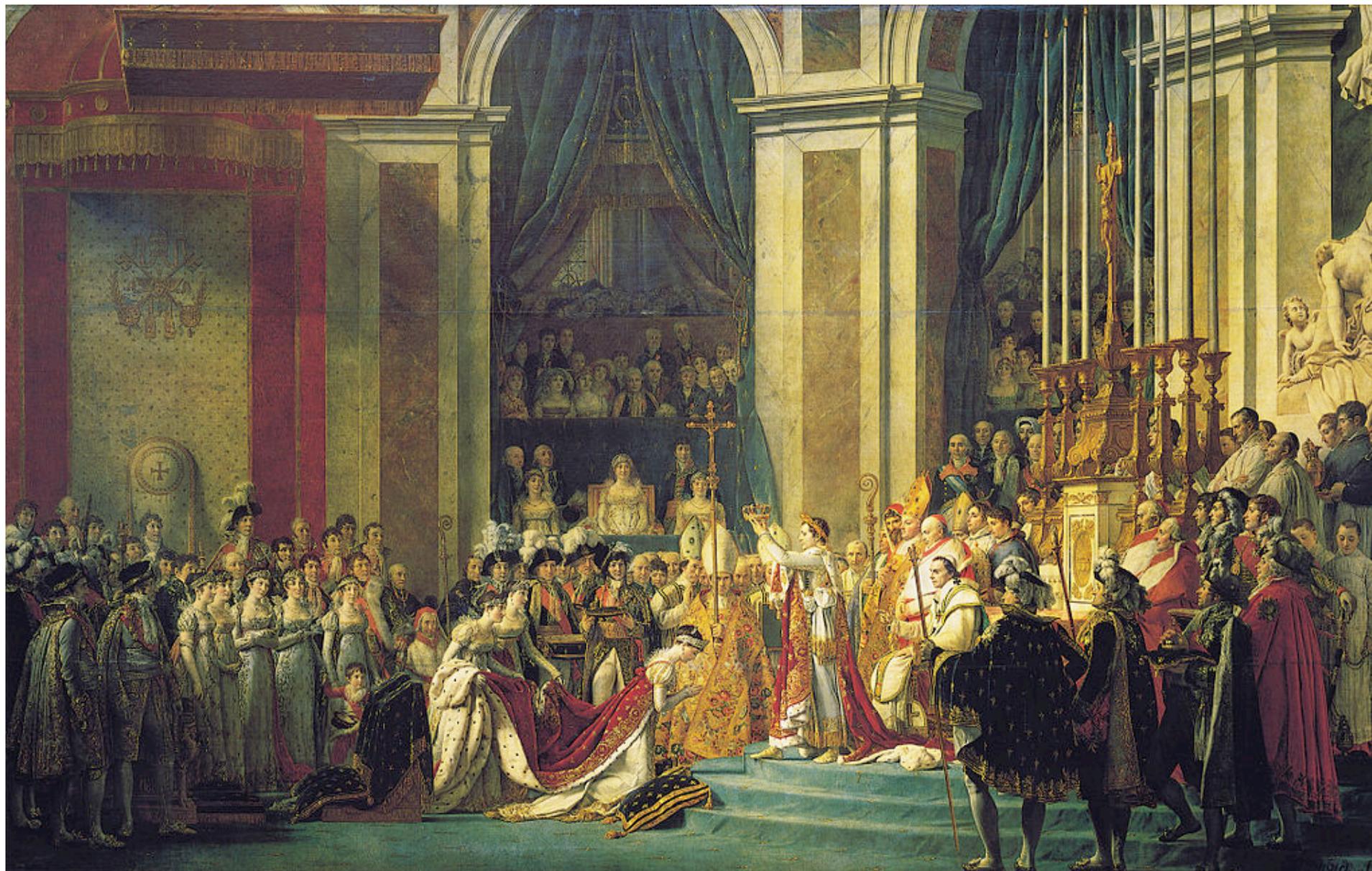
《オイディプスとスフィンクス》 (1808)



画像:<http://art.pro.tok2.com/l/Ingres/Ingres4.htm>

《グランド・オダリスク》 (1814)

新古典主義絵画 ジャン=オーギュスト・ドミニク・アングル (1780 - 1867, 仏)



新古典主義絵画 ジャン=ルイ・ダビッド 《ナポレオンの戴冠式》（1808）

※ ナポレオン1世は、カトリック教会の権威に屈せず、ローマ教皇をパリに呼びつけた。修正前の原画では自らによって戴冠する図が描かれていた。

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、  
啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

1. 〈創造性〉は神のみがもつという神話がダメ

2. 自然、それ自体を模倣することがダメ



画像：wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、  
啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

## 1. 〈創造性〉は神のみがもつという神話がダメ

- ※ 人間だって創造することができる。場合によっては「天才」になれる。
- ※ 人間中心主義、機械論、進歩主義などの現れ

## 2. 自然、それ自体を模倣することがダメ

- ※ 自然を、ではなくて、ギリシア美術の作品を模倣すべし。  
なぜなら、ギリシャ彫像の輪郭の美は、自然美と理想美の  
両者を一つにする最高の観念だから。線描への価値付け。  
(ヴィンケルマン 30)。
- ※ シャルル・バトウーにみる「自然模倣論」への批判
- ※ まさに「ギリシヤ美術模倣論」。
- ※ 人間中心主義、合理的精神のあらわれ？



画像：wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、  
啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

〈自然模倣論〉 = 〈ミメーシス〉

「人間の精神は本来何も創造することができない。、、、

天才が、、、気紛れから自然の法則に反する組み合わせを作る

とすると彼は『自然』を貶め、かくて彼自らを貶めることになり、  
一種の狂気に陥る。

〔自然の限界を〕超えるや人は、自らを見失い、、、一種の混乱を

生み出し、歡喜というよりはむしろ不快をひき起こすことになる」

シャルル・バトウー (1747 = 1984) 『芸術論』山縣熙訳、近代美学双書、p.26  
(啓蒙主義的芸術論の批判対象としての「自然模倣論」の当時の代表格)。

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、  
啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

「人間の精神は本来何も創造することができない。、、、

天才が、、、気紛れから自然の法則に反する組み合わせを作る

とすると彼は『自然』を貶め、かくて彼自らを貶めることになり、  
一種の狂気に陥る。

〔自然の限界を〕超えるや人は、自らを見失い、、、一種の混乱を  
生み出し、歡喜というよりはむしろ不快をひき起こすことになる」

いや、人間の精神は創造することが出来る！（啓蒙主義的芸術論）

## 自然 - 人間 を分節する (物心二元論) のルーツ

# ルネ・デカルト (1589 - 1650)      Rene Descartes

それまでの中世のスコラ学、神学を批判して、合理的探究 (科学) の基盤をつくった



画像 : <http://www.ghc.usp.br/server/Sites-HF/Fabio-Ardito/>

- 「私は考える、それ故に私は有る」 (哲学的思考の出発点)
- 神の合理的な存在証明 (証明の目的 = 人間の認識能力の正確さを担保するため。ただし証明に難あり)
- 精神と物質の〈物心二元論〉へ (精神と身体、人間と自然、あらゆる二項対立が派生)

## ギリシア美術摸倣論

ギリシア ビジュツ モホウロン  
 ヴィンケルマン著；澤柳大五郎譯  
 東京：座右宝刊行会，1976.11

ブックマーク

● 所蔵：

◆	巻号	刷年	所在	請求記号	資料ID	状況	予約・取寄	予約人数	備考
1 <input type="checkbox"/>			相図：開架	702.31 W76	057194		<input type="button" value="予約"/>	0	
			杉図：開架	702.31 W76	057193				

全て選択

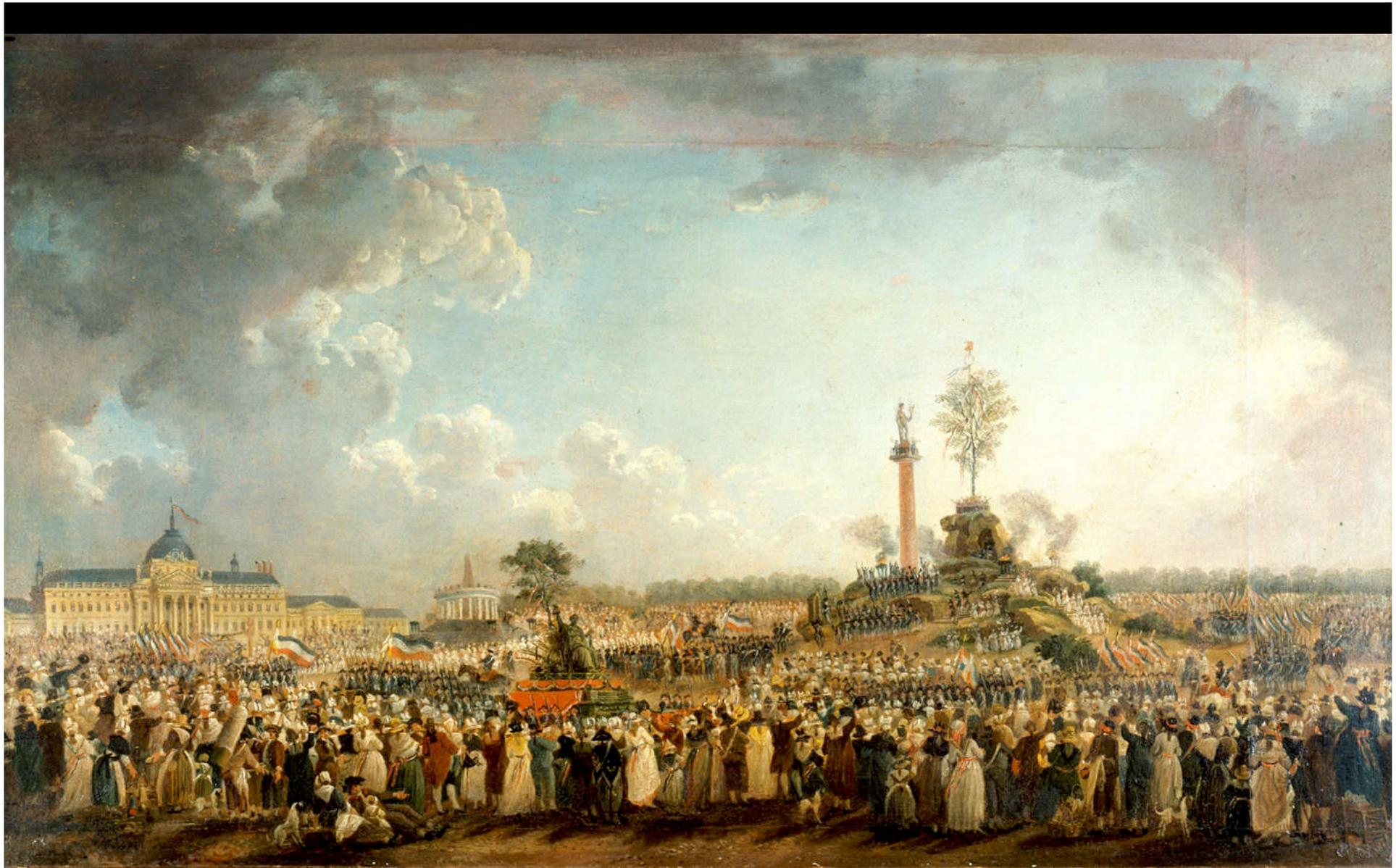
選択解除

巻号ブックマーク

「 啓蒙のユートピア [※ が提示したもの] とは  
宗教と政治の伝統主義と権威主義を全否定し、  
世界市民としての人間が中心となった、  
新たな市民共同体の青写真 [※ = 未来設計図] なのである 」

「 過去のすべての 伝統と権威をリセットして、  
新しい社会秩序と価値体系を創造していこうとするのが、  
啓蒙のプロジェクトなのである 」

脱キリスト教時代 (近代) の、〈国民国家〉における〈藝術〉の役割とは？



「最高存在の祭典」（人為的につくられた合理的な宗教、人工宗教） 祭典の演出は画家のジャック＝ルイ・ダヴィッド  
“ Festival of the Cult of the Supreme Being,” 1794

新たな国 (※ 近代国民国家) は、**新たな理性的な宗教**を求めた。

「それを作りあげるための拠り所として

白羽の矢が立てられたのが、

**アルス※ (科学、技術、芸術)**であった。

したがって、**近代ではこれらへの価値付けが高くなる**」

※ ラテン語 ars。「術」の意味。手段、方法、手だて。英語は art。

[ 松宮 54-55 ]

近代の市民国家においては、新しい理性的な宗教が求められた。

その拠り所となったのは、アルス(科学、技術、藝術)であった。

イギリスやフランスでは、このうち、特に「科学と技術」が価値付けられた。

一方、ドイツでは、「藝術」が価値付けられた。

つまり、特に、近代ドイツでは、以後、「藝術」が、新たなる宗教的な位置に

まで、価値付けられていくことになる。

新たなる神として位置づけられた「藝術」は、超越的であり、  
人間の世界から隔絶された、普遍なる存在であることが求められた。

ここにおいて、「藝術の自律性」が問われるようになる。

音楽でのベートーヴェンは、このような芸術を具現化する、  
「天才」として、代表的な存在となる。

かくして、藝術は自律化の道を辿り、その規範は「音楽」に求められること  
になる。

# 「すべての芸術は音楽の状態を憧れる」

ウォルター・ペイター (文学者、批評家) 1877年

(ウォルター・ペイター「ジョルジョーネ派」『ルネサンス:美術と詩の研究』富士川義之訳、東京:白水社、1877年=1993年、141頁。)

※ 音楽は外界の模倣に表現が依存せず、たとえば器楽曲のように、人間の世界を超越するかのよう、作品自らの形式のうちに逐次に内容を表現しうる表現とみたため。

## 【まとめ】

- ・ 18世紀後半、主に、フランスとドイツでの文化的・社会的動向の話
- ・ 仏、啓蒙思想が絶対王政を批判した（ディドロ、ルソーら『百科全書』、カント『啓蒙とは何か』）
- ・ 啓蒙思想に基づく文化的動向は「新古典主義」運動にあらわれる。仏にももたらされる。
- ・ 主唱者、ドイツの美術史家 ヴィンケルマン 『ギリシア美術模倣論』（1755）
- ・ 啓蒙思想は、伝統的権威を〈徹底的に〉粉砕せずにはいられない
- ・ 「新古典主義」は絶対王政的なるバロックやロココの様式や趣向を批判した。
- ・ 啓蒙主義的「リセット」（松宮, 99）は、あるべき表現を、遡って古代ギリシャに規範をみた
- ・ 一方、近代市民国家はその体制維持のため、キリスト教に変わる、新たなる宗教をもとめた
- ・ アルス（科学、技術、藝術）に白羽の矢が立てられた
- ・ とくにドイツではこのうち「藝術」が価値付けられた
- ・ 従って、ドイツでは、以後「藝術」が、新たなる宗教的な位置にまで価値付けられていく

以上